

「正義は求めるだけじゃだめ。実現する経済的な力があるの。」
—ベーシック・インカムと先住民族、2013年夏アラスカ—

岡野内 正

<合衆国政府と向き合うアラスカ先住民の代表>

州政府を飛び越えて、合衆国政府と直接に交渉する権利を持つアラスカの先住諸民族全体の代表は、アンカレッジの町のビルの上に事務所を構えていた。ゼミ生有志も同行するほぼ2週間のアラスカ調査の最後のイベントが、その先住民会議のプレジデントとの会見。最初は、副プレジデントが会うという話だったのに、後のメールで質問内容として、先住民族の権利を実現させるために、1980年代以来、アラスカで取れる原油のうち州政府の取り分となる収益を積み立てて運用し、投資収益をもとに、毎年変動する一人当たり約20万円が全州民に無条件で配られているアラスカ恒久基金配当 (Alaska Permanent Fund Dividend) を引き上げて、ベーシック・インカムの実施を要求していく可能性は？ などと書いたのが興味を引いたせいか、プレジデントが会う、ということに。

<アメリカのホーム・ドラマの母親役？>

プレジデントは、名前からみて女性かと思っていたら、やはりそう。白人ばかり出てくる一昔前のアメリカのホーム・ドラマの背の高い母親役のような感じ。エスキモーとアリュートとアメリカ・インディアンという大きく分けて3つの民族集団からなるとされるアラスカ先住民の人たちの中には、見るからに日本のどこかの人にそっくりのアジア顔の人もいれば、こんな感じのヨーロッパ風の人も。副プレジデントも若い女性で、法律の専門家。メールでやりとりしていた秘書の若い男性は、アラスカの州都ジュノーで会おうとしてうまく連絡の取れなかった、アラスカ恒久基金投資会社 (Alaska Permanent Fund Corporation) の元取締役で、アメリカ・インディアン系の先住民族が住むあの地域の原住民地域会社 (Native Regional Corporations) のうちでも巨大なものの一つ、シーラスカ (Sealaska) の取締役でもある重要人物の息子さん。「彼のパパは、あなたたちが興味をもっているアラスカ恒久基金の役員だったのよ。」とプレジデントがさりげなく紹介してくれる。ひょろりと背の高い長髪黒髪で黒い眼の彼は、日本の大学の教室に座っていても違和感がない。

<恒久基金配当よりも原住民地域会社配当>

プレジデントの采配で、われわれ一同に飲み物が行き渡り、一通りの自己紹介やら、組織の紹介やらのあとで、プレジデントに聞く。「先住民の立場からは、アラスカ恒久基金配当のもとになっている原油からの収益は、先住民のものになるべきでは？」プレジデントは答える。「私たち先住民族と合衆国政府との間での交渉の結果がこれなの。1971年のアラスカ原住民請求権措置法 (Alaskan Native's Claims Settlement Act) っていうやつね。その結果、私

私たちは、原油が取れるあの土地じゃないところの権利と、かなりの資金をもらって私たちが株主になる会社を地域ごとに創ったっていうわけ。…あれからほぼ40年。ほんとうにいろいろたいへんだったけど、私たちは、会社をほぼ順調に育ててきたわ。…あの会社、原住民地域会社は、たくさんあって、それぞれの業績が違って、全体の利益の一部は、いろんな会社の株主に平等に配当として分配されることになっているの。その意味では、アラスカ恒久基金配当の先住民版のようなものね。もちろん、恒久基金配当は、特に都市でないところに住む私たち先住民にとっては、かなり生活の役に立っているの。でも、金額の面でもそれよりも多いのが、原住民地域会社の株式配当。だから、私たちが最も力を入れているのが、会社の運営なの。」

<正義を実現する経済的な力>

「なるほど、恒久基金配当よりも、原住民地域会社配当のほうが、先住民の生活にとっては重要というわけですね？」

「そう。あなたがいうように、アラスカの原油の収入がもっと私たち先住民族の生活のために使われていいと思うし、歴史的に見れば、アラスカは私たちのもの。…だけど、ただ、そういう正義を主張するだけではだめなの。正義を実現するには、経済的な力が必要なのよ。合衆国との交渉の過程で私たちが学んだことはそのこと。だから、今は、私たち自身が経済的な力をつけることが大事なの。それが、地域会社の運営。賢い資源の利用と雇用の創出、そして、配当金の分配が必要なの。」

<シーラスカの遺産保全部長>

州都ジュノーでは、その原住民地域会社シーラスカの本社ビルの受付で、運よく、人類学者としても有名な民族遺産の保全部門の責任者の初老の女性と出くわした。アラスカ恒久基金の原資となっている石油収入が先住民のものではないかと思うのだが、という私たちの疑問を聞いたとたんに、彼女は、ニコッと微笑んでいった。

「ふふふ。あなたたちは、私たちが、なんて寛大な人なの、っていいたいのね？ …全くその通りね。私は、さきほどまで、歴史の論文を書いていたところ。クリミア戦争のあとに、ロシア帝国がアメリカ合衆国にアラスカの地を売ったときのこと。私たち先住民の祖先は、だれも、ロシア帝国に入りますなんて言った人はいなかったわ。そんな土地をどうして、ロシアがアメリカに売るなんてことができるの？…でも、現実はごらんのとおりの。アラスカはアメリカ合衆国の一部になって、原油収入は、州政府のもとへ。そして、その投資収益が恒久基金配当として州民全員に配られるってわけね。」

<続く土地問題の交渉>

「そういえば、土地問題の交渉は今でも継続中でしたよね？」

「そう。私たちは譲歩を重ねて、ここまできて、…でも大事なことは、いまでも主権、自

分たちで自分たちのことを決める権利を保持しているってこと。まだまだ、これからね。」

彼女のことは、私たちがアラスカで最初に入った町ジュノーで最初に話した先住民の若者 T さんが、畏敬を込めて語っていた。T さんは、彼女のもとで民族遺産の収集と保存の仕事をやっていたことがあり、あの地域の美しい島の原生林の伐採権を持つ先住民の土地原住民地域会社シーラスカの伐採計画と、それを批判する合衆国全体の環境保護団体などとの間で意見の食い違いが発生した時に、メリハリの効いた形で部分的に森を守るやり方を提案しつつ、あくまで自分の土地の使い方を自分たちで決める先住民の権利を主張したことで有名になった人だという。

<海外旅行か修学資金>

その T さんは、ジュノー周辺地域の先住民、いわゆるアメリカ・インディアン系諸民族の代表会議 (Central Council) のビルの一階で、保健・医療系の人材紹介の仕事をやっていた好青年。突然の訪問だったにもかかわらず、仕事を中断して、わざわざ別室に案内して、「いやあ、君たちの質問したいがとてもおもしろいね。」といいながら、質問に答えてくれた。とにかく、就職がむずかしい。だから、若者の自殺が多い。自分は、バンドを組んでるミュージシャンでもあり、ジュノーの少し南にある美しい島の出身。そこの踊りももちろん踊るよ。祭りのときにくればよかったのに！…とにかく、いまは、この仕事をがんばってやる。自分たち先住民のためにできる最善のことをやりたい、と。アラスカ恒久基金についての私たちの関心それじたいが、興味深いようす。…「たしかに、ほとんど狩猟や漁労で暮らしている自給自足のような先住民の村では、恒久基金配当は、大いに生活の助けになっているね。今じゃ、寒いこの地でたくさん使うようになった灯油やガソリンが高いからね。でも、みんなもここの物価を見てわかるだろうけど、町に住んでいちおう仕事がある人たちにとっては、まあ、冬の休暇の前のちょっとしたクリスマス・プレゼントのようなもんだ。子どもがいるところは、修学資金にためておいたり、そういうのがない人は、海外旅行資金だね。メキシコとか、ハワイとか。」

<みんなに配るっていうの、俺は好きだね>

日曜と休日が入ってしまうと、博物館以外は行くところがなく、有名なジュノーの氷河なども見に行く。若い時にほかの州から移住してきたという、中年白人のタクシー運転手さん。恒久基金のことに話を向けると、「ははは。あれは、毎年 11 月に振り込まれるから、ほんと、クリスマス・プレゼントだね。アラスカはこれがあるからいいね。俺は、ああいう発想が好きだね。石油のもうけを全員に配るっていうやつ。合衆国政府の福祉っていうと、ほんとうにむかつくよ。働かずに福祉で暮らして、そのくせ車を乗り回しているやつがいるんだ。ああいう福祉はきらいだね。俺なんか、こうやって、休日の朝から働いてるのにな。」

そうはいっても、ジュノーの大通りのかなりど真ん中に、ホームレスのための避難所、そして、無料で食事を提供するところがある。商店街の中にあるビルの一階が、食堂兼たまり

場になっていて、常時 20 名くらいはいるかという中年以上の男女、ちらほらとあきらかに先住民系の顔の人も。タクシー運転手の言う、遊んで暮らせる福祉の人々がこの人たちかどうかは、わからない。

<ホームレスの避難所>

食事のときにおいでよ、ごちそうするし、というのを遠慮して、食後時間に尋ねたのが、今思えば残念。…総勢 10 名ほどで、見学に行く。ボランティアの料理スタッフが説明してくれる。その間にも、二人連れの警官が登場して、だれやらがきたら連絡してくれ、といった、きなくさい会話も。ホームレスが凍死するといった事件がきっかけとなって、有志が資金や労力を出し合って数年前に発足したとか。市長さんは、毎年彼の恒久基金配当を寄付してくれるとか。そうしてくれる人は多いという。2 階が事務所とホームレスの宿泊所、そして 3 階には温室つきの屋上庭園があって、トマトやレタスなどを作り、宿泊するホームレスの人が作業し、できた野菜を下の無料食堂で出すという。案内の料理長は、元コックだそうで、俺の料理は昔から町の評判なんだと胸を張る。…そんな説明の間にも、20 代の若い女性が、料理ボランティアとして現れたり。

<先住民を殺すアルコール>

日曜の昼下がり。ホテルの近くの小さな先住民記念公園には、明らかに先住民系の老夫婦と息子らしき家族がベンチに座って陽だまりの中でビールを飲んでいる。…こっちはそのそばに座り込んで、公園の先住民の民話のレリーフを見ながらアイスクリームを楽しんだのだが、向こうの家族は、どうやら飲んだくれの老夫婦とすでに 30 代かと思われる息子との間で、時たま大声が出る険悪さ。…こちらは早々に切り上げて、その前の横断歩道へ。渡ろうとすると、30 代くらいに見える精悍な顔つきの男性がよろよろとふらついて、横断歩道の真ん中で、どたり。まわりにぷーんとアルコールの臭い。…車が止まって、その気配で彼はまたよろよろと起きだして、歩道へ。歩道をゆらりゆらり、私たちの前を歩いていく。通りがかった先住民系の顔つきのでっぷり太ったおばあさん、なにやら言葉をかけて、酔っ払いおじさんのほうは、おばあさんが話し込むのを神妙に聞いている。「兄弟 (Brother) !」と呼びかけるのが聞こえたようで、親戚かしら、と思ったが、単に同じ先住民の若者が泥酔しているのを見かねての声かけかもしれない。先住民の若者の失業率は 80%、自信と居場所をなくして自殺が絶えない、とい T さんのことばが駆け巡る。…先住民の歴史ではどこでもだが、特にアメリカでは、白人のもってきたアルコールが先住民の生活をずたずたにした歴史が。…そのせいか、先住民のプレジデントとの最後の晩餐でも、向こうの人は全員アルコール抜き。「アルコールと私たちは特別な歴史があるからね。でも、いいのよ、気にしないで、あなたは飲んでもいいわよ。」とのプレジデントのことばに甘えて、ワインを頼んでしまったが。

…

<ジュノーの町の底力>

日本でいえば、木曾路の旅籠町のように、タイムスリップを感じさせる古いアメリカンな街並みが、ジュノーの下町だ。我々の宿も史跡指定の築100年のくすんだホテル。明らかに先住民系の会社が経営する先住民ブランドのコーヒー屋が何件もあり、この地域の先住民の図柄をアレンジしたグッズを売っている。アメリカで人気のアラスカ・クルーズの目玉停泊地なのだ。…ふとした街角に、障害者の作業所があって地元アーティストの展覧会をやるアトリエが併設されていたり。土曜には、食品まつりとやらがあって、行ってみれば、地元の有機農家や工芸作家の土曜市。夜には同じ会場でチェロ・コンサート。もう何年も続くイベントらしく、こちらに先住民系の顔は見当たらないが、それでも、ボランティア社会といわれるアメリカ市民の底力のようなものが見えるような。…

ジュノーは、19世紀末に金鉱が採掘されるようになって、大きく栄えた町。町はずれには、当時の金鉱の跡地が、さまざまの建物の廃墟に説明プレートをつけただけの歴史公園となっている。金鉱の労働者として、日本人、中国人、フィリピン人なども多くいたようで、町にはフィリピン系の人物の銅像や、会館も。先住民差別に対して激しく闘った先住民女性もこの地に現れた。…州都なので、その下町にはずれに、アラスカ恒久基金の資金運用を担当する恒久基金会社の本社ビル、町の中心部には、恒久基金配当の配分を担当する州政府の窓口も。ホームページでは、移入してまもない州民などの不正受給を審査し、詐欺として摘発する活動が宣伝してあったが、窓口のお姉さんお兄さんは愛想がいい。

<アラスカ大学南東（ジュノー）校>

下町からバスで30分ばかり。氷河の山を望む美しい湖（池？）のほとりにキャンパスがある。メールで連絡をつけていた先住民研究担当の、先住民の大学教員とのインタビュー。湖を見通して氷河の山が見える美しい学食で昼食のあと、ふとみれば、階下に先住民学生センターの部屋。訪れてみれば、先住民女性の職員が大歓迎。あらかじめ連絡をくれれば、先住民学生とのミーティングを設定したのに、と悔しがること。学内を案内してくれる。彼女は、アラスカ恒久基金とベーシック・インカムを結びつける私の説明に大いに興味をもってくれる。…学期はじめの多忙の中で時間を割いてくれたまだ若い大学教員のJ氏は、この地域の先住民のことばで我々を歓迎する挨拶のあと、ベーシック・インカムの可能性と恒久基金の関連に関する質問に答えて言う。「お金の問題じゃないんだ。失われる文化、奪われた言葉をなんとかして取り戻すこと、これがいちばんの問題なんだ。ほら、彼のように、私たちの親の世代でさえ、自分たちの民族のことばがしゃべれなくて、いまようやく大学で学んでいるんだ。」と、たまたま先住民学生センターに来ていた初老の男性を見て、ニコッと。

<アンカレッジ>

ジュノーは、山と海に囲まれたこじんまりとした美しい町だが、アンカレッジとフェアバンクスは、だだっぴろい扁平な街並みが広がる、いかにもおもしろみのないアメリカの町。

経済の中心はこっちだ。原油が出る北極圏への玄関口、フェアバンクスの町に向かう直前に、アラスカ恒久基金の設立当時、政府の委員会でその設立の議論にかかわった弁護士さんに会ったのはこの町。最近になってベーシック・インカム研究者の間で、急に脚光を浴びて、相次いで刊行されたアラスカ恒久基金に関する本の一部を執筆している事情通だ。「いやあ、学部生まで含む調査団とは驚きだ。いままで二か国からぼくのインタビューにきた調査団がいたが、せいぜい院生だよ。すごいもんだね。」と、こちらに対して興味津々の様子。スナックを出すから、事務所まで来てね、というメールでの約束どおり出してくれた、アラスカ名物ブルーベリーのお菓子をつまみながら、2時間ばかりのインタビュー。

<“できちゃった”基金配当>

彼の説明は、こうだ。「あれはね、“できちゃった”基金配当なんだ。…委員会では、ほんとうに、いろんな意見があったよ。とにかく、原油が見つかって、採掘が始まって、州政府に突然入ってきた大金。それをどうするかってことだよ。…アルミニウムの大精錬工場を作るっていう計画もあって、ずいぶん熱心に計画も立てたよ。ダムを作って、電力を作って、もちろん、道路も、送電線も、大工場も、の大工業化計画さ。…でも、結局、そういうのはやめよう、っていうことになったのさ。そんなことをやっても、結局、外部の企業、外部の技術者、州外の人たちに金が回るだけさ。そんなことより、州民の金だ、みんなでわけよう。ひとりひとりが使い道を決めればいい。そうなったわけさ。…これから？ 石油は、どのみちなくなるね。そうすると、その大金が消えていくわけだ。そうやってきたときにどうするかだね。すっかり根付いてるから、政治家がだれもやめたがらないだろうね。でも、お金がなくなるとしようがないさ。どうなるかなんて、だれもわからない。」

先住民にとっては、どうかしら？と聞けば、「先住民とは、原住民請求権措置法があるからね。いまさら州の土地の原油にどうのこうのはないし、その政治力もないね。まあ、先住民も含めて、いろんなところからの移民も含めて、みんなにお金が配られるところが、恒久基金配当のいいところかな。」

<アラスカ大学フェアバンクス校>

北極圏に近いフェアバンクスまで行った大きな目的は、『アラスカの石油；多国籍企業対政府』という本を出したアラスカ大学フェアバンクス校の政治経済学研究グループに会うためだった。…という私の意気込みで、訪問の前夜、私は早めに熟睡。ほかのメンバー全員は、タクシーで町はずれに向かい、深夜までねばって、オーロラを見たという。…なかなか充実の大学内の博物館、しかも、第二次大戦中の日系人の強制収容とともに、先住民のアリュート民族も日本との内通を疑われて強制収容され、それに対する合衆国政府の謝罪と補償にまでいたる展示も。

学期はじめの学生たちでござったがえす授業の合間をぬって、政治学科のフロアで、場所を変えながら2時間余りのインタビュー。まず、驚いたのは、執筆グループの教員たちの誰も、

無条件で個人々の生活を現金移転で保証し、失業をなくし、自由な経済活動を促すというベーシック・インカムコンセプトを知らなかったこと。彼らの本には、恒久基金のことも書かれているのだが、最近のベーシック・インカム研究からの熱い視線は、まったく知られていない。日本でもそうだが、学問のタコソボ化を痛感しながら、コンセプトを説明し、こちらの質問をぶつけてみる。

<「そんなふうに考えたことはなかったな。おもしろいね。」>

「本には、恒久基金配当は、ポピュリズム（大衆迎合政治）だって、書かれていたけど、大衆の意向の中に、悪いものじゃなくって、自分のことは自分で決めたい、っていう自決権という、民主主義にとって大事なものが含まれているっていうことはないですか？ そこに官僚政治を乗り越えていきたいという人々の思いがあるのでは？」

「うーん、そんなふうに考えたことはなかったな。おもしろいね。…とにかく、私たちが考えたのは、一度できてしまった恒久基金配当は、もう誰もやめることはできない聖域になってしまったっていうこと。そして、原油が枯渇してくるこの先に、それをどうするかが問題になってくるだろうこと。…これから先住民族の問題がどう動いてくるかも、まだまだそこまでの力は持てないだろうとね。」

先住民問題についても書いていた女性の研究者が言う。「でも、たしかに、若い人の人口を見ると、出生率の高い先住民の比率は高いわね。それは重要なことだと思っているわ。」

<とにかく、町とは全然ちがう。>

いちおうホテルだったジュノーとは違って、フェアバンクスの宿は、バックパッカー向けのホステル。少し歩くと米軍基地で、朝晩、ラッパの音が聞こえる。肝っ玉母さんの雰囲気の宿の女主人は、やはり、他の州から若い時に旅しにきて、ここが気に入って、同じ境遇の彼氏を見つけて、気が付いたら20数年とか。…先住民とアラスカ恒久基金という私たちの旅の目的を聞いて、彼女は、かつて、洪水被害からの復興で数か月間、田舎の先住民村に住み込み、復興作業の経理の仕事をした時のことを話してくれる。トイレも水道も、基本的な衛生施設がなにもない村。都市との落差があまりにも大きくて、愕然としたという。政府が、そんな基本的な生活に必要なものにお金を使わないのはおかしいと感じたという。

フェアバンクスでも、小さな公園を会場にした有機農業者たちの直売市があって、宿の女主人もクレープの店をだし、訪れれば無料サービスありというので、一日フリーチケットでバスに乗ってみんなで出かける。…アラスカは他州よりも物価が高く、ふつうのレストランでさえ日本の気取った店よりも高いくらいなので、宿ではかなり自炊にし、帰りに、スーパーマーケットによってお買い物。広大な駐車場に、有名なウォールマートなどのスーパー、そしてガーデン関係や、電気、コンピューター関係などの巨大な店舗の並ぶ、いかにもアメリカな光景。

<石油会社が資金を出してクジラ漁？>

アンカレッジからフェアバンクスへの行きは、展望車のついている列車にしたのだが、帰りは、節約して、乗り合いタクシー。ほぼ一日がかりでハイウエーをすつとぼしながら、運転手とよもやま話。…兵役でアラスカに来て、そのまま残って大学を出たという。飛行機整備会社から、なんと北極海の原油採掘会社で石油探査に必要な物資調達部門の責任者までやり、いまは退職して、時々タクシー運転手をやっているという。…北極海の先住民について聞けば、石油会社が資金丸抱えで、船まで出して先住民にやらせているというクジラ漁の話をしてくれる。…とんでもない話だという口調だが、そこには、石油採掘によって先住民の生活がどう変わったかという話はない。フェアバンクスの図書館の司書をやっている彼の奥さんの話として、フェアバンクスにもストリート・チルドレンが、とも。先住民の子供ではなく、白人の子供で、どうやら家庭に問題があるらしく、夜じゅううろついていたという。

<アンカレッジの夜>

そうやって、アンカレッジの町の中心部にある安宿へ。周辺を少し散策すれば、労働組合の事務所、ゲイ・レスビアン・センター、レイシズム反対センターなどの看板。それぞれ、後学のためにあとで見学に。博物館、アラスカ大学アンカレッジ校、さらに先住民病院などを見学。そして、メインが、冒頭に紹介した先住民族代表への訪問だった。

冒頭の会話のあとで、学生のひとりがプレジデントに質問した。「先住民の人たちは、アメリカから独立したいと思っていますか？」プレジデントは、にっこり笑って、即座に答える。「そうよ。独立したい。できることなら。」この大胆な質問には、通訳の私が驚いたが、この大胆な答えには、私だけでなく、むこうスタッフたちも、驚きの顔。プレジデントは急いで付け加える。「ふふ。盗聴器はないわよね。でも、ほんとうに、そう思う。もともと私たちはここで自立していたのだから。…でも、今じゃ、それはむづかしい。せめて、アラスカの原油をすべて渡してくれるなら、それは可能ね。もちろん、軍の基地とか、いろんな問題もあるけど。」

そんな話し合いをおもしろく思ったのか、帰り際に、プレジデントから、最後の晚餐へのご招待。アラスカ最後の夜は、アンカレッジの中心部のレストランへ。プレジデント周辺のスタッフである先住民の若者たちも含めて、フルコース・ディナーをつつきながらの交流会。

<無条件現金移転プラス地域生産協同組合>

アラスカ恒久基金配当の金額は、ベーシック・インカムコンセプトを充たさないほどの低額だ。つまり、それだけの額では、最低食べていける金額に達しないので、自由に経済活動を始める前に、食べるための心配をせざるをえない。それでも、無条件の現金移転としては、人々の自由な経済生活を、平等に支えるうえで、足しにはなっている。原住民地域会社は、株式会社ではあるけれども、地域コミュニティの人々が共同で事業をやって、その利益を分かち合うというその内容からいえば、地域の生産協同組合といってもいい。ベーシック・

インカム研究では、おそらく恒久基金配当のおかげで、アラスカ州は、アメリカ合衆国の中ではもっとも貧富の格差が少ないと指摘されている。

アラスカの貧民のほとんどが先住民族だとすれば、貧民たちがそれほど貧しくないのは、恒久基金配当だけでなく、原住民地域会社配当のおかげもあるはずだ。どちらも、土地を奪われた先住民族と、合衆国政府との間での、土地返還交渉の歴史の中から生じてきたものだ。つまり、先住民の土地を奪って大工業とハイテク産業を発達させてきたグローバル資本主義の成果を、分かち合おうという動き。これまでの世代の人類全体の血と汗の成果をもとに、人類全体で自由な経済活動ができるような社会にしようという動き。

その歴史はまだ終わってない。地球上のだれもが、どこかの先住民なのだから、土地返還の動きが高まったとき、人類がそろって、土地への権利を、現金移転への権利として手にするときにくるにちがいない。いま、全世界の、とりわけ途上国の間で進んでいる現物援助から現金移転への転換（現金移転革命）は、そんな流れの現れといえるかもしれない。アラスカの先住民の未来を、そんな全世界の動きとの関係でとらえなおすことができれば、未来を思うアラスカの人々を力づけることができるはずだ。 (2013年11月17日)